初代白神、今におわせば

立命館大学　桂島宣弘

はじめに

ご紹介に預かりました、立命館大学の桂島と申します。本日は、教祖生誕二〇〇周年を記念してのお集まりの一つとお聞きしております。まことに意義深い場にお招きいただき、ありがとうございます。

金光教の教会長の皆様方の前でお話をするというのは、私、二回目の経験でございますが、前回は 2,001 年のことでございます。今回同様に渡辺順一先生にお招きいただきました。もう 13 年も前で、私が 40 代半ば過ぎのことでございました。後ほどお話ししますが、大して変わったつもりではなかったのですが、既に還暦を迎え、そろそろ人生の終盤にさしかかってまいりますと、金光大神あるいは初代白神新一郎との向き合い方も変わってまいります。そうしたことに気づかされた機会をお与えくださったことに、あらためて感謝申し上げます。

本日は、そうした視点から、金光大神あるいは初代白神について、少々お話しをさせていただきたいと考えています。信心をもっているわけでもない者が、こうしてお話しさせていただくことについて、まことに恐縮しておりますが、教外とはいえ、約 40 年近く金光教から学んできた者ではございます。何かのお役に立てれば、これに勝る喜びはありません。なお、今更言うまでもないことではありますが、ご承知のように「しらかみ」はのちに金光大神より賜った神号であり、当初は「しらが」と読んでいたようでありますが、ここでは「しらかみ」で統一いたします。

最初に、14 年前に私はどんなことを話したのか、について簡単に振り返っておきます。全く恥ずかしい内容なのですが、『府連だより』の 25 号に掲載されています。

「金光大神との出会い」というタイトルとなっていますが、そこで私は生意気にも、歴史学界の関心としての金光大神について次のようなことを言っております。

先ず、「金光大神との衝撃的な出会い」として、吉田松陰、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、坂本龍馬とか、ドラマとして見ても非常に激動的でおもしろい幕末維新期について、同時代に浅口郡金光町に「座り続けていた人」（金光大神＝赤沢文治のことですが）がいるということに、私は非常に衝撃を受けたと述べています。また、民衆史というのは、たとえば百姓一揆とか、あるいはこれまた華々しく活躍する民衆、圧政に対して戦っていく民衆みたいなものがクローズアップされる、そういう理解から見ますと、まさに激動の幕末維新期に「座り続けていた人」ということを何としても歴史学の中に位置づけたい、と述べています。さらに言えば、その座り続けていたところから日本史を捉え直すというのが、より日常的な民衆の世界を見ていくことにつながるのではないか、とも。

また、これまた不謹慎にも、「神がかり」ということについても、「神様の声が聞こえなくなったのが近現代である」「江戸時代には、誰でもできることではないにしても、かなりの修練を積んだ人は、神様の声を聞いたり語ることができた」「われわれ自身、気がつかないでいる自分の深部が、素直に出てくる」、それが「神がかり」だなどと定義づけています。「病気直し」についても、近代的な病気観を批判して、「難儀」「いたが病気」というものは、自分の人生の中で、自然との関わりの中で、神々との関わりの中で意味を持つもので、機械論的身体観に基づく「治癒」とは異なる「人と自然と神々との奥の深い関係の中で起こってくる問題」としての「病気」を「直す」のが、教祖等が行った「病気直し」だと述べています。当時としては、もっとも疑問に思っていた「神がかり」「病気直し」について、精一杯の理解を述べて、教会長の皆様方からご意見を窺いたい、という魂胆だったのだと思います。

また、その後、金光教教学研究所を中心に研究は飛躍的に進んだと思いますが、当時は 1983 年の『金光教教典』所載の『お知らせ事覚帳』についても、私はかなり興奮して話をしています。『金光大神御覚書』というものは、『お知らせ事覚帳』を恐

らく元にしながら、明治に入ってから書かれたものだと思いますが、『覚書』には書かれていない事柄がある。とりわけ、『覚書』よりもはるかに近代という時代の中での金光大神の葛藤、近代という時代の中で非常に苦悶している教祖の姿がある。そこから、近代というものが、どれだけ人々の生活や、あるいは人々の内面、宗教や信心の問題に大きな揺さぶり、混乱、動揺と変化、変質というものをもたらしたのか考えるようになった、と。これも、従来までの学界での通説的見解、たとえば村上重良先生や安丸良夫先生らの見解、それは多分に近代的存在として金光教・金光大神を捉えるものだったわけですが、それを覆すような内容が『覚帳』に書いてあり、研究者としての関心から取り上げたのだと思います。

まあ、今読み返しますと、正直、内心忸怩たる思いがあります。要するに、過去の私と向き合って気づかされたのは、確かにそこには研究者としての分析的視点があり、さらに当時はまだ色濃く研究の世界に残っていた宗教、民衆宗教、金光教に対する近代からする眼差しに対して、自分がいかに新しい視点を打ち出したのか、という自慢、傲慢がありました。無論、まだ言うかと言われるかもしれませんが、私が金光大神の言説から学んだことは、近代人が失いつつあるものであり、このとき言っていることについても、今も撤回するつもりはないのですが……。研究者というのは、どこまでも傲慢なものです。

しかしながら、このときの私の話の中には、具体的な生き様をかかえ苦悩している人間の臭いとでもいうものがあまりしない。このことに私は愕然としました。還暦を迎え、どこまで成長したのか分かりませんが、歴史学が時代を描く、歴史を描くというのは、実はどこまでも、そこに生きた人間の苦悩と向き合うことなのだと、最近はよく考えるようになりました。本日は、その点を少しだけ意識して、金光大神そして初代白神について、私が考えていることをお話しして、与えられた責任を全うしたいと思います。

１．金光大神＝赤沢文治について

始めに、やはり教祖金光大神＝赤沢文治について、お話ししなければならないと思います。やや不謹慎なことではありますが、研究を離れましても、今ももっとも尊敬している歴史上の人物の一人としまして、金光大神がおります。それは、信仰の対象、先達として捉えておられる皆様方とは、無論違う視点なのですが、金光大神＝赤沢文治の研究を志してから 40 年弱、私は尊敬している人物と接しているという意味では、その研究は大変楽しいものでありました。余談ですが、私の指導教員である衣笠安喜先生は、研究対象を尊敬してはならない、思い入れがきつくなるので、ということをおっしゃっておりました。そのことが関係あるのか、今でも私の論文で結構評価されているのは、私が嫌いな本居宣長などの論文の方です。金光教につきましては、無論それなりに評価されているとは思いますが、同じような民衆宗教を研究している仲間に限られているようです。

いずれにしましても、私が赤沢文治を尊敬している、好感を持っているのは何故なのか、今回少し真剣に振り返ってみました。こんなことは初めてなのですが。その結果それは大体次の二点にまとめられるのではないか、と思いました。

第一に、『金光大神御覚書』『お知らせ事覚帳』の語り方・語り口です。神様と語り合いながら書いていくというそのスタイルは、未だ私がほとんど見たことのない類の書き方です。印象深い箇所が幾つもあるのですが、時間の関係もありますので、二箇所だけ申し上げます。先ず金光大神「42 歳の大患」の箇所です。安政二年＝1855 年のところですが、石鎚の神様の言葉で金光大神の「のどけ」が「金神への無礼」のためであると告げられ、それに金光大神の妻の父が反論したところ、石鎚の神様に叱られるわけですが、そこで金光大神が「無礼」を詫びた。それに続けて次のようにあります。

「戌の年はよい。よし。ここへ這い這いも出て来い、と。今言うた氏子の心得ちがい、其方は行き届き。正月朔日に、氏神広前まいり来て、どのように手を合わせて頼んだら。氏神はじめ神々は、みなここへ来とるぞ。〇
ここまで書いてから、おのずと悲しゅうに相成り候。
金光大神、其方の悲しいのでなし。神ほとけ、天地金乃神、歌人なら歌なりとも詠むに、神ほとけには口もなし。うれしいやら悲しいやら、どうしてこういうことができたじゃろうかと思い、氏子が助かり、神が助かることになり、思うて神仏悲しゅうなりたの。また元の書き口を書けい」。

大変有名な箇所で、ここにご列席の先生方の前でお話しすることは恥ずかしい限りなのですが、ここには、金光大神の神信仰の全てが凝縮していると考え、かつて私は論文で次のように書きました。

「注目されるのは、文治の神信仰の大きな転換となったと言われるこの事件が、全て伝承的民俗信仰の枠内で起こっている点である。石鎚信仰の神懸りによる神託を始め、この記事には『氏神』『神々』『神ほとけ』といった言葉が散見しており、明らかに伝承的民俗信仰の世界を想起させる。しかも、この事件からはるかに隔たった明治七年段階の記述として『神ほとけ、天地金乃神』と見える。神ほとけと天地金乃神が並記されている中に、天地金乃神が神ほとけと併存する存在であったことが示唆されているのではなかろうか」。

私はそれまで村上重良先生などが「天地金乃神」を「一神教的最高神」としておられたことに異論を唱え、江戸時代の民俗信仰との関連に、金光教等の民衆宗教を位置づけようと考えていました。この論文も、もう三十年以上前に書いたものですが、そうした視点から述べたものでした。もっとも、その当時から、この金光大神の書きぶりが大変気になっていました。あるいは、大変惹かれるものがありました。それは、論文の主題とは異なるものであり、したがって書きませんでしたが。

今回あらためて読んでみて、ここで金光大神が、神様と実に人間的な感情を通じ合っている様に、私が感動したことに気づかされました。金光大神が語り合い、あるいはその言葉を伝え、世に顕した神様とは、まず何よりも悲しんだり、うれしいことを共有する存在なのだということ、そしてそれをこのようにまさにリアルタイムに記述できるのが金光大神なのだということ、そこに私が一人の人間として強く惹かれたのだということに気づかされました。同じようなところは、安政五年＝1858 年の神様と一緒に歌を歌いながら「唐臼（とううす）ひき」をしている箇所にも生き生きと描かれています。

もう一箇所申し上げます。こちらは『お知らせ事覚帳』の明治九年＝1876 年 6 月 24 日条です。

「一つ、金光大神、人が小便ひりかけてもこらえておれい。神が洗うてやる。人がなんと言うてもこらえておれい。天地の道つぶれとる。道を開き、難渋な氏子助かること教え。日天四　月天四　金神をどうなりともしてみいと申しておれい」。

ここもかつて私は「天地の道つぶれとる」という箇所だけを取り出して、そこに明治維新後の金光大神の世相批判を見た箇所です。それでも、この前後の箇所は、その当時から大変印象が残っていた箇所です。人間に汚されても「神様が洗ってくださる」「難渋な氏子を助けることを教えているだけなのだから、どうなりともしてみい」。既に 63 歳に達していた金光大神の、それまでの人生に裏打ちされた、重たい一言です。こうした言葉に、私は大変強い衝撃を受けるとともに、金光大神には歴史的存在であるというよりも、まさに時間を超えたところでの人生の先達としての魅力を感じていたのです。

第二に、難儀している人びとの「ご理解」に描かれている金光大神の人柄です。言うまでもないことですが、「ご理解」は信心している方々の言葉を集めたものであり、そこに教祖批判が存在していないことは、むしろ当然だと私は思っておりまし

た。したがって、さほど驚くことでもないだろう、と。ところが、よく考えてみると、金光大神は確かに生き神ではあっても、決して普通の人間と変わる存在ではない。まさしく、最初に信心を得て、金神＝天地金乃神との対話をへて、生き神への階梯を身を以て示した先達的存在ということになります。したがって、何よりもその先達的存在としての金光大神に惹き付けられ、そこに人生の目標を置いた人びと、やがて生き神へと至る道筋を見いだした人びとが、信心を得た人びとということになるわけですが、その大前提としては何よりも金光大神自身が、何ものにも代え難い、人を惹き付ける力がある方だ、ということになります。この点は、民衆宗教研究の大家である安丸良夫先生も注意を促しておられ、近世社会内で通俗道徳を率先して実践し、人生の辛酸をなめ尽くし、さらに宗教的にもさまざまな鍛錬をへた人間像こそ、民衆宗教の教祖像であるとしています。このことは、私もだいぶ前から理解はしておりました。しかしながら、これは研究の世界での、研究書の言葉による理解であって、その意味ではかなり抽象的な説明だったのだと思います。そして、私自身、実は「理解」をひもときながら、知らずその教祖像に魅力を感じつつも、やはり「理解」から、たとえば「神がかり」や「病気直し」さらに伝承的民俗信仰に関する言を引用することに専念し、当の金光大神の人柄については封印してきたのだ、と今回気づかされました。幾つか金光大神の人柄が偲ばれる箇所を引用します。

「私のことを人が、神、神と言いますが、おかしいではありませんか。私が、なんの、神であろうぞ。私は、何も知らぬ、土を掘る百姓であります。……これへおいでなされるお方が神様であります。……あなた方が神様のお子でありましょうが。生神ということは、ここに神が生まれるということであります。私がおかげの受けはじめであります」（徳永健次 341）。

「天地の間にすべて、おかげはみちわたりてある。信心してまめで働けば、わが身の得で、人がほめてくれる。我欲になりて悪いことをしておると人が戒める。人は見んと思うておりたら、天地の神様の鏡に映るから、心を改め信心するがよろしいなあ」（山本定次郎さだじろう 366）。

これらの箇所からは、金光大神の謙虚な人柄もさることながら、何よりも、自らが「おかげの受けはじめ」である、自らが信心して「おかげを受けた」先達であることが、ズシーンと伝わってきます。考えてみますと、金光大神の教えとは、百姓としての、人間としての、凡夫としての自らが、「おかげを受けた」その体験に基づいたものなのであり、そこに私を惹き付けてやまない力が存在していることに、今回気づかされました。

２.初代白神との出会い

さて、話が金光大神の方に集中してしまいました。ここで本日の主題となる初代白神についてお話ししたいと思います。私が初代白神のことを知りましたのは、いわゆる「直信」と言われている信者達が、どのように金光大神と出会い、その信仰をどのように受け継ぎ、発展させていったのか、という研究を始めてからです。元々は、二つの関心があったように思います。

一つは、教祖以上に伝承的民俗信仰の世界内にあったと思われる「直信」たちが、どのように教祖の信仰を捉え、かつそれを消化し、そして伝承的信仰にどのような変容をもたらしたのか、という問題に関心がありました。初代白神以外には、藤井きよの、斎藤重右衛門、高橋富枝、大森うめ、片岡次郎四郎、難波なみ、佐藤範雄、近藤藤守らの研究に従事しました。これは、『金光教学』に載せられた『金光大神事績集』や金光教教学研究所が所蔵している『金光大神言行録』などに載せられている史料ではありますが、たとえば、**「手みくじは、此方から授けてやっているのであるけれども、手が激しく動くと、人がのりくらのように思うから、昼間はただご理解だけしてやっておけ」「教祖様は”口走り”もあった。才崎金光様（＝片岡次郎四郎）に**

は”胸浮び”もあり”右手首”にも感じた。金子明神様（片岡次郎四郎の妻、庄）は”胸浮び”と”左手首”であり、中井金子明神様（大森うめ）は”左手首”だけ。亀三郎金用明神様（片岡次郎四郎の父）は”右中高指”でした」「（斎藤重右衛門は）げっぷのお取り払い」という「願い人の病気が初代の身体に乗り移ってきてゲップとなって病気を取払う」といった史料に私は大変興奮し、近世的な信仰をそこから復元しようとしたわけです。初代白神についても、**「当時、おいさみということがあった。初代白神先生には、特にはなはだしかったが、それに対して、金光様から戒められたことがあった」**という言説を見いだしました。私は、こうしたことについては、かつて以下のように小括したことがあります。

「こうした流行神的様相は、そもそも金光教自体が、金神の流行神化の過程で生まれてきたことを考えると、むしろ当然であったと言わなければならない。すなわち、赤沢文治自体が、開教以前は伝承的金神信仰の熱心な信仰者であり、いわゆる『四十二歳の大患』以後は、実弟香取繁右衛門を通じて『堅盤谷の婆さん』と呼ばれた金神祈祷者（小野うた＝はる）の信仰に触れていた。この『堅盤谷の婆さん』の前には、（いずれも現在の倉敷近郊かと思いますが）長尾の楠木屋、連島（つらじま）の文十郎という金神祈祷者の系譜が知られており、かれらはいずれも金神の『祟り』を鎮める独自の祈祷者、換言するならば、流行神化した金神信仰の布教者・祈祷者であり、『生き神』としての『金神』として民衆の前に姿を現していたと考えられる。初期金光教団や赤沢文治は、こうした流行神と連続しながら登場し、したがって先ずは民衆からは同様の眼差しで捉えられることになったのは、かくて当然の事態であったと思われる」。

言わば、教祖以上に伝承的信仰の中にあった人びととして「直信」を捉えることに一生懸命で、かれらが金光大神と出会って、どのように人生を変えられたのかという点については無頓着だったように思います。その点は、今は本当に恥ずかしく思います。

第二に、文明開化の中で、どのように金光教の信仰が変容していくのか、ということに私の関心がありました。ここでも、初代白神については、『御道案内』について、とりわけ「藤沢本」（1871 年）と「伊原本」（1881 年頃）の比較が、私の当時の議論では、不謹慎な言い方で恐縮ですが、大変都合のよいものでした。「藤沢本」については、民俗的「金神」、つまり「祟り神」としての「金神」の強力な存在を指摘しています。たとえば、冒頭部の次の箇所など。

「一つ、日天四様月天四様のあらたかなることは諸人知るといえども、地に金神様の、そのありがたきことを知らずや。……天地日月金神様、合わせて三宝様なり。日夜、世界中をご守護ましまし、なお御激しきこと諸人知るとおりなれども、またその代わり、善事にはご柔和なる大慈大悲大吉神。金乃御神一のご眷族には三年ふさがりの大将軍様、ご縁日三日なり。大氏神運勢第一大吉神、金乃御神様、愚かなる者嘲弄し、もしお気障りとも相なりて、おさえを受くることある時は、運勢にかかわり左回りとなり、ついに患いの端ともならんか。諸人知るとおり、御激しき時は七代七殺、なお、にわかに日の暮れたるように身上をもばたばたにしてしまい、跡には青草の生え」。

私は、これを初期金光教団の「流行神」的様相とし、当時の金光教の布教者たちが、「大谷の金神」（＝赤沢文治）「赤壁の金神」（＝難波なみ）「中井の金神」（＝大森梅子）「鍛冶屋の金神」（＝金光喜玉）「本庄の金神」（樋口鹿太郎）等と呼ばれ、伝承的な「金神」の「語りべ」的存在と見なされていたことと関連させています。一方では、恐らくは一神教的信仰とは異質な「働きとしての神」としての「金神」にも注目し、**「金神様には、世界一統だれかれとなく氏子とのたまい、おかげは、日月様の照らしたまうかげのごとく充満のおかげを御授け、御助けたきおぼしめし。…お道に入る、信心と申して、何もむつかしきことにあらず。神文ということもなし、お初穂いらず、**

お祓いをあげ、経巻を読誦することも気任せ。産汚れ、死汚れ、婦人月役の汚れとも言わず。わが宅にお棚あればよし、なくとても、その家々に金神様はお詰めきりおわしますなり」という箇所を引用しています。

ところで、『御道案内』（伊原本）については、「その神観念に大きな変化が認められるようになる。まず、神の整序化、『一神教』的傾斜とも言うべき表現が見えるようになる」として、次の箇所を挙げています。

「天地王御神様の御道初めて開けし天ケ下無二広大の御蔭のまにまに余り有り、大御元社は正直を基とする。神国に生れて日夜御蔭を蒙らざるは無く、又、御蔭が無くては人界は立たず。……世界第一大氏神天地大御神様…毎日結構なる日柄なるを或は悪日抔と云うこと勿体なき次第なり。是御規則同然なり」。

「此尊き金叮（きんてい）の御代に　其金乃御神様にも開化御一新に御座ます事を知らずや。或は口には誰も御一新とは申ても矢張り旧習の事を云ふ人も有り、終には疑ひ、云ひ崩す人もあり、当時御規則と此御道と萬同じ事を得と考へ、思ひ競べ合せて見るべし」。

こうした変化について、政府による弾圧が関係しているものとして、「その口実は、直接には『教導職』ではない者の布教活動を取り締まることにあったようだが、『おいさみ』と呼ばれる一種の『神がかり』等の布教手段が問題視されていたことも、大きな原因であったようである」と述べて、「こうした事態に対して、白神新一郎は自己の『開明性』を打ち出すことで、対処しようとしたものと思われる」と結論づけています。

実は先生方の前で、こうした傲慢きわまりない内容の分析を披瀝すべきか躊躇いたしましたが、やはり私にとっての最初の初代白神との出会いでしたので、敢えて申し上げました。要するに、「直信」たちの言行から、近世的な信仰を復元し、それが近代以降には急速に変容していく、という筋書きに乗せて叙述していたわけで、その近代の変容と必死に立ち向かっていたかれらの姿には無頓着だったのだと思います。

とはいえ、この頃から「直信」たちにも金光大神と同様に惹かれるものがあったのも事実です。そのことを物語るものとして、確か教祖没後 100 年のときに作成されたものでしょうか、石田勝心監督・鈴木瑞穂主演の「おかげはわが心にあり」という映画があります。この映画は、私の金光教祖像にも影響を与えておりまして、金光大神というと鈴木瑞穂の顔が浮かぶくらいです。初代白神は平田昭彦が演じたと記憶していますが、同じく初代白神というと彼の顔が浮かんでしまいます。「あいよかけよ」の白神役も彼だったと記憶しています。こちらも朝日座に見に行きました。もう 30 年も前になりますが…。そのときの初代白神の台詞は、今も忘れられません。確か「人は皆おのれのために神に祈る。この方は違う、この方は人のために神に祈るのだ」といったような台詞だったと思います。何故こうした話をしたのかといいますと、初代白神、金光教大阪布教の礎を築いた初代白神につきましても、個人的には大変惹かれるものが当時からあったのだと思います。実は、今回再度『御道案内』を読み返してみて、ここでも研究上の関心とは別に、初代白神という方に何故私が惹かれるのか、について考えてみました。

先ず何と言っても、初代白神が金光大神と出会い、助けられ、その喜びを直ちに文書にしているという、その「素早さ」です。初代白神は、自分が救われたということを、とにかく人に伝えたかったのだと思いますが、その助けてくれた方あるいは助けてくれた神様が、未だ世に知られていない、そのことが口惜しくて、とにかくその方、神様について伝えたかった、それが『御道案内』とりわけ藤沢本の内容になっているのだと思います。初期金光教団には、こういう人びとが沢山いたのだと思いますと、心が熱くなってまいります。いずれにしましても、最初の箇所には、そうした初代白神の急いでいる気持ちがよく表現されていると思います。

「小子、近ごろお道に志し、おかげをこうむらんと欲して、日夜、信心のまねせし

ところ、かたじけなくも、日増しにそのしるしあり。
新参未熟の小子、お道の兄（このかみ）たちにははばかりありといえども、あまりありがたさに、三つの宝のあまりあるおかげを知らぬ貴賤の御氏子とともにいただかんと誘わんがために『御道案内』と表題し、…見聞するところ思い出のまま書き記すのみ」

そして、『御道案内』には、**「神心は仕得（しどく）、御影は取勝（とりがち）」**という言葉がよく出てきますが、「信心さえすればこんなにいいことがあるのにどうして信心しないのか」という初代白神のやや急いた気持ちがよく伝わってきます。

また、既に「おいさみ」のところで気づいていたことではありますが、初代白神は人を助けるためには大変一途で激しい人だったと思います。『御道案内』伊原本には次のような箇所があります。

「諸葛武候は、風を乞い祈りて魏の八十万の軍を皆殺しに亡ぼさんと為す。小子はもし干魃の時は、雨を乞い願ひて世界中を潤ほし幾万人を助けんと欲す。又平生は如何なる憂き難病人も一河の流れを汲むも、袖の振り合わせも他生の縁なり。たとえ逆縁の者たり共順縁となし、御道を知らざる人に、何卒縁を求めて、御道を以て小子助けんと心を尽くす…」。

「此御道の者は、無学文盲、不知不才の老若男女共に、我を捨てて身をいとわず、只まこと一心を以て病気にも限らず世に難渋の人を慈愛し、救助するを御道の本意、信仁となす。我事は願わずとも神や守らんとの御誓い、御教えなり」。

本当に人助けをしたいという初代白神の激しい気持ちが伝わってくる箇所だと思います。したがって、「おかげ」を取り外す人に対しても、やや厳しく論難する箇所もあり、初代白神もそれに気づいたのか、**「書記する中に、誹謗する様に似たるところあるとも、左に非ず。前にも申す如く　人を助けて己が助かるの道理、何ぞ外を誹謗なして己れ達せんと云ふに非ず。唯、開化御一新の此の御道知らぬ人に理解を致すのみ。あしからず思慮なし給へ」**と述べています。面白い箇所だと思います。こうした初代白神の急いた気持ち、激しい気持ちが、私にとっては魅力的なところだったと思います。

以上、今回、あらためて私が金光大神と初代白神のどのような点に惹かれているのか、お恥ずかしい限りではありますが考えてみたところを述べさせてもらいました。

ところで、こうしたことを考えているときに、実は金光大神・初代白神の「助け」の内容について、共通する点があることに気づきました。最後にお話しします「初代白神、今におわせば」という話と関係しますので、ここでその点について述べさせていただきます。それは、金光大神・初代白神のいずれも、神様からの「おかげ」や、あるいは神様からの「助かり」を、きわめて具体的に述べているということです。

金光大神に関していえば、これは私がよく卒業生にはなむけの言葉として贈っている箇所なのですが、慶応三年十一月二十四日に受けた、教えの一つの区切りとして受けた言葉です。

「一つ、日天四の下に住み、人間は神の氏子。身の上に、いたが病気があっては家業できがたし。身の上安全の願い、家業出精（しゅっせい）、五穀成就、牛馬にいたるまで、氏子身の上のこと、なんなりとも実意をもって願い。
一つ、月天四のひれい、子ども子、育て方のこと、親の心、月の延びたの流すこと、末の難あり、心、実意をもって神を頼めば、難なく安心のこと。
一つ、日天四、月天四、鬼門金神、取次金光大権現のひれいをもって、神の助かり」。

卒業生には、これをこのまま言っているわけではありません。「幕末の備中のお百姓さん、その生き様で近代以降の多くの難儀している人びとに影響を与えた備中のお百姓さんが、人間のあり方について、大変具体的に教えています。太陽・月の下で平等に生きている全ての人間にとっては、①身の上安全、②働けること、③持続的な五

穀成就など、自然界の全ての存在と共生していけること、④安産と育児、これらがもっとも基本的なことだと言っていますが、実はそれだけでは、ありません。むしろここからが大事ですが、こうした人間の基本的なあり方は、太陽・月・大地の大きな働きあればこそ実現できるものであり、したがって、その働きの前に謙虚に生きていくことがもっと重要であると言っています」と、まあこんな具合です。いずれにしましても、金光大神が述べ、行ったことは大変具体的であったことが、私にとっては印象深い箇所でありました。初代白神の場合は、『御道案内』とりわけ伊原本が、そもそも「巻乃中」以降は全て具体的な「おかげ話」集となっていて、初代白神自体が、先に述べたような、とにかく早く救いたいという願いについて、大変具体的かつ日常的に考えていたことは、分かりやすいと思います。私には、ここでの「おかげ話」は、全て初代白神が見聞し、あるいは直した話が書いてあるのだと思います。なぜなら初代白神自身が、**「神　信厚致す家にても、災難なきにしもあらず。災難有る時はよきこと嫌う人は、あの人は信心致しても災難ありとあざけり、笑いけるが、是も大災を小災で逃れし事は知らず、ついに心を迷わす人有り」**（123）と大変正直に述べているからです。むしろ、それを「大災を小災で逃れし」と言い切っているところには、初代白神の何があろうとも動じない信心が、よく示されていると思います。いずれにしましても、金光大神・初代白神のいずれにおいても、その「助け」は大変具体的で、したがって実践も具体的なものであったということが、私にとって今回あらためて気づかされた点でありました。

３．初代白神、今におわせば

さて、本日のタイトルは「初代白神、今におわせば」です。大変難しい論題ではありますが、最後にこの点について私見を述べさせていただきたいと思います。

先ず、「今」とはどういう時代でしょうか？

色々な考え方があるとは思いますが、ここでは歴史学に従事している者としての視点から申し述べます。私は、「今」とは、金光大神や初代白神が生きていた幕末・明治維新期と同様の激しい変動期、もっと強く言えば時代を画するような激動期だと思います。とりわけ価値観の劇的変動の前に、私たちが翻弄され、先行きが見えにくくなっているという点では、大変よく似た時代を生きているように思います。

先ず、金光大神や初代白神の生きた時代、明治維新をまたいだ十九世紀ですが、江戸時代までの価値が否定され、とりわけ西洋式の近代的価値観が洪水のように入ってきた時代です。幾つかの指標があるでしょうが、武士階級が否定され、儒教・仏教、さらに伝承的民俗信仰の多くが否定的に捉えられるようになりました。いわば、それまで「尊い」とされていたものが否定され、全く新しい近代的価値観・西洋的価値観が次第に優位になっていったわけです。金光大神や初代白神は、いやが上にも、この価値観の大きな変動に立ち向かっていったのだと思います。そして、私はかつてはそこに近世的金光教から近代的金光教団への変容を探っていたのですが、一方でそこを懸命に生き、さらには変わらぬものを必死に掲げ続けていた営為には、かなり無頓着だったと思います。それは何だったのか、この点について、私は今までの金光教あるいは民衆宗教研究を総動員して考えてみますと、次のようにいうことができるのではないでしょうか。

すなわち、いかなる時代にあっても、如何に価値が変容しようとも、人間とは「小さな凡夫」なのであり、それをひたすら助けたいと願っている「大いなる」神との関わりなしでは生きられない存在なのだということ、逆にいえば、その神との関わりが生まれて、初めて時代の激変下でも変わらぬ「生きる意味」「生きる力」が与えられるのだ、ということ。金光大神や初代白神が、体験したことがら、あるいは「生き神」になったということは、この神と触れ、この神を、人びとに顕していったからなのだと思います。

金光大神や初代白神のような人びとは、恐らく未曾有の混乱期にあったから生まれ、そして少なくとも今に至るまでの先達＝モデルとしての役割を立派に果たされたのだと思います。少なくとも、近代人が学ぶことがらが沢山ある、人生の「意味」の宝庫だと思います。私が、研究とは別に、金光大神や初代白神に惹かれていた、ということも、この宝庫の一端に触れることができたからだと、今は考えています。

もう一つは、これは特に初代白神に言えることだと思いますが、それまで農村で生活してきた人びとが近代化・工業化に伴って、都市で生活を始めた。今日でこそ日本の圧倒的多数の人びとは都市生活を営んでいますが、明治維新期までは人口の八十五パーセントは農民として農村で生活していたわけです。それらの人びとが、明治期から大正期にかけて大量にはき出されて、都市である東京・大阪等でなければ生活できないこととなった。厳密に言えば、戦前期は米以外にも工業に用いられる原料、たとえば木綿や絹は農村で生産されていましたので、日本の農村は未だ重要な位置を占めていたわけで、戦後の高度成長期さらに低成長期をへて最終的に現在の都市中心の姿が立ち現れるに至るわけですが、それでも産業都市・工業大都市というものが初めて出現したのは明治時代です。その典型的な都市の一つこそが大阪で、初代白神が岡山からここ大阪での布教を志したということは、まさにこの農村から、いきなり都市にはき出されてきた人びとが、全く新しいタイプの難儀に苦しんでいた姿を目撃したからだと思います。つまり、それまで長い間農村で生活してきた人びとが初めて直面した難儀と向き合い、さらに近代的都市型の病気といってよいコレラとも向き合いながら、果敢に布教を行ったのが初代白神だったのだと思います。ここに、私はこの時代の民衆宗教でなければ担えなかった、つまり天理教も含めて金光教などが布教し、爆発的に信者を増やしていった理由の一端があると考えています。つまり、その時代が、あるいは都市が急速に失っていったもの、それは一言では言えませんが、神々や自然、さらに人びととつながりながら生きていく生き様そのものだったと思いますが、それを身を以て示し、かつそれを体現した存在として講社が、教会が存在していたからこそ、多くの都市で生活を始めたばかりの人びとの目には、まさに生き生きとした「神代」としてそれが受け止められ、したがって多くの人びとがそこに集ったのだと、私は考えます。

さて、「今」です。私は、「今」とは、これまた未曾有の激変期・激動期だと考えます。どれから指摘したらいいのか分かりませんが、一つは明治維新期の資本主義化が多くの農村では食べていけない人びとを生みだし、都市民としてはき出したことからいえば、現在のグローバル資本主義の展開、それに資本が打ち勝とうとしているために採用されている新自由主義的競争原理などは、明治時代と匹敵されるような、あるいはそれ以上の多くの矛盾と格差を生みだし、何よりも多くの「難儀」を抱え込んだ人びとを排出している時代になっていると思います。それは、大変具体的な「難儀」を、日々生みだしています。「貧困・病気・失業・非正規雇用・自殺」など、どれを採っても大変深刻かつ具体的です。明治時代と違って、一見してもそれと分からない姿となっているので、却って悪質かもしれません。病気についていえば、言うまでもなく「心の病気」とでもいうべき病気が、多くの人びとを苦しめています。私事で恐縮なのですが、実は今年の三月まで四年間、私は勤務先の立命館大学文学部で学部長を務めました。別に好きでなったわけではないのですが、立命館大学は学生数四万人弱という大きな大学ですので、現代社会の縮図のようなところがある。様々なことがらを見せつけられ、色々と考えさせられるところがあったことだけは、いい勉強になったと思っています。とりわけ深刻なのは、学生は無論、職員や教員の多くの人びとが、なかなかうまく人間関係を作ることができず、苦しんでいるということです。こうしたことから、「心の病気」にかかっている方々が実に沢山いる、ということに私は衝撃を受けました。まさに、これこそが、なかなか表面には顕れてこないとはいえ、深刻な現代の病気なのだ、「助け」を必要としている病気なのだと、私は痛

感いたしました。また、長引く不況、ひょっとしたらそれだけではなく、世界的な資本主義競争の激化に伴って、学生の就職状況も、きわめて厳しいものがあります。立命館大学はまだいい方なのだと言われていますが、実はデータに表れてこない問題がある。それは仮に就職したとしても、厳しい競争が続き、中途で辞めてしまうということが結構多い。そして、一度辞めてしまうと、今度は正規雇用で就職することが極端にできなくなってしまう、という問題があります。現在、学生時代に借りた奨学金が返還できない方が一挙に増加していると言われていますが、その背景にはこうした問題も存在しています。さらに大学院まで出ると、とくに人文系は就職がかえって悪くなる、という状況があります。ここには、本日は私の研究室の大学院生が集っていて、これは言いにくいのではありますが、高学歴になればなるほど就職が悪くなる、あるいは研究者を目指しつつも、なかなか就職できないという事態が、韓国も同じでしたので、世界的に進行しているように思います。いずれにしましても、こうしたことがらは、明治時代とは異なって、一目で分かるものではありません。その分、かえって事態は深刻なのだと私は考えます。

また、グローバリゼーションのすさまじい進行は、確かに国際的な知識・能力を今までになく私たちに要請しています。昨日まで韓国の大学にいましたが、韓国では三カ国語や四カ国語をしゃべれるような大学生が沢山います。日本の大学はこの点では大変遅れていて、これからどうやって追いついていけるのか、考えさせられる毎日でしたが、かつての農村から都市へということと対照させるのであれば、今やいきなり世界に放り出されるような時代・世界を迎えているのだと私は考えています。日本は、この点では韓国・中国と比較しますと大変遅れていて、これから若者はどうやってこの世界で生きていくのか、私は大変悲観的な気持ちになっています。無論、このことは、いわゆる言語教育を進めれば解決する、という問題ではないように思います。世界がどこに向かっているのか、韓国の若者、多言語をこなす彼らも、そのことに大きな不安を抱えているように思いました。要するに、グローバリゼーションの進行とは、世界の行方を、ますます見えにくくしている。確かものが、見えないということが、現在の世界なのだと思います。

もう一つは、すさまじい情報氾濫です。インターネットは無論、「facebook」や「Line」のようなソーシャルネットワーク、ブログの発達で、デマや差別発言を含めた情報が大量に世界中に出回る事態となっています。無論、これは悪い面ばかりではなく、かつては考えられなかった広範囲の人びとの絆、結びつきも生んではいるのですが、私には「炎上」と称せられている攻撃的情報が非常に恐ろしいことになっていることが気かがりです。さらに、匿名性の情報が、それをますます無責任なものにしているように思います。いわゆる「ヘイトスピーチ」も、こうした背景の中で生み出されたものと、私は見ています。優しさの感じられない社会が作り出されているように思います。

もう一つどうしても取り上げておかなければならないのは、環境破壊、放射能汚染、新種の病気の出現などの問題です。これらの問題の原点も、私は明治時代にあったと見ています。いきなり資本主義的近代化が始まり、公害問題・都市問題・新しい伝染病の問題などが広く起こってきています。明治期の民衆宗教の先達達は、それと格闘し、確かに多くの人びとを具体的に「救った」のだと、私は考えています。今や、それとは比較にならないレベルでの、すさまじい環境破壊・自然破壊と新種の病気が生みだされている時代を私たちは生きているわけです。

また、戦争と平和の問題があります。このことも、今や楽観できない段階にあることを、とりわけ昨日まで韓国で生活していて、日々痛感させられました。韓国や中国の人々は、本気で日本がどこに向かっているのかを心配しています。

こうした事態を、金光大神や初代白神が見たら、どのように言うのでしょうか？ど

のように行動するのでしょうか？
　この点は、教会長の皆様の前では、とても恐ろしくて言うことはできません。ここからは、私の独り言だと思って聞いていただければ幸いです。
　まず、幸いなことに、いずれも既に金光大神・初代白神の時代に「初発の経験」があるということに注目したいと思います。その意味では、そこから徹底的に学ぶことができるはずなのだと思います。しかも、私が、教外の者ですので、お許しを願いたいのですが、そこに学ぶ、ということは決して抽象的な教えということではなく、具体的な実践としてあるのではないか、ということです。
「難儀」や「そこからの助かり」も大変よく似通ってきていることに、今回の準備を通して私は気がつきました。いや、実は世界に目を転じると近代以降ずっと同じことが続いていたのに、日本の経済成長の中でそうしたことに目をつぶってきたのかもしれません。あるいは、こう言ってもよいかもしれません。十九世紀以降、日本はアジアで最初の近代国家となったことで、さまざまな問題や矛盾の多くが、外に転嫁されていった。他のアジア諸国に転嫁されていったことで、とりわけ二十世紀後半以降は、日本社会の表面では問題が見えにくくなっていた。それが、最近の大きな激動期を迎え、再度還流してきているのではないか、と私は考えます。いずれにしても、明治期と同じ問題が、ここ日本でも同じように顕れてきているのではないでしょうか？
　先ほどの「今」の話に戻れば、「病気」「貧困」「人間関係の悩み」「行方の分からない不安」「自然との関係の破壊」、こうした問題は、まさに金光大神や初代白神が直面していた問題と同じ問題だったように思います。
　そのように考えますと、たとえば初代白神であれば、「助け」を急き込み、激しい「助け」に従事するのではないでしょうか？ 初代白神は、「助け」を急き込み、郷里岡山を離れ、わざわざ「難儀」の人びとが密集している大阪伝道を、諸葛亮孔明のような気概で志した方です。さらに、晩年には、東京布教も志していたと言われています。佐藤金造『初代白神新一郎師』によれば、初代白神の「ご理解」＝お話しは、「誠に懇切で、細をうがち微に入り、諄々（じゅんじゅん）として倦（う）むことなく、そぞろに肺に入り、心根に達し、聴く者をして自ずからに帰依の情をおこさせた」とあります。また、「師の朝夕のご祈念は実に周到なもの」で、「日夜無事安全の神恩のお礼、不行き届きご無礼のお断りに始まり」、次に「天下太平・五穀成就、万皆（ばんかい）安全の御願いより、官員士農工商の職業にある者、山野河海に働く者に至り、上下四方あまねく及ばぬはなく」、また「盗人、火付け、総じて心得違い、悪徒の者」のためにも祈ったとあります。また、非常に質素倹約を旨としていた、ともあります。
　自らが助けられたことを顕すことで、人びとを助けることに一心であったその姿には、私のような教外の者も励まされる思いです。教外の者がこんなことを言うのも不謹慎かと思いますが、私も、そこに学んで、この時代、一体何ができるのかを真剣に考えたいと思います。

　以上、私自身の勝手な思い込みで申し上げた部分、あるいは大変失礼なことを申し上げた部分もあると思いますが、何とぞご海容のほどをお願いしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。